

## 山口市総合教育会議 会議録

審議会等の名称	令和7年度山口市総合教育会議
開催日時	令和7年11月21日（金曜日）15:00～16:54
開催場所	山口市役所6階 第2委員会室
公開・部分公開の区分	公開
出席者	<p>山口市長 伊藤 和貴</p> <p>山口市教育委員会</p> <p>教育長 藤本 孝治</p> <p>委員 山本 晃久</p> <p>委員 横山 洋之</p> <p>委員 佐藤 真澄</p> <p>委員 角川 早苗</p> <p>委員 鮎川 友子</p> <p>委員 須藤 邦彦</p> <p>山口市立宮野小学校 教諭 金谷 亮二</p> <p>山口市立二島中学校 校長 金丸 耕治</p>
欠席者	なし
事務局	<p>総合政策部長 岡村 萬利雄 総合政策部次長 高村 永悟</p> <p>企画経営課長 宮原 尚規</p> <p>こども未来部長 鯨田 慎治</p> <p>教育部長 石津 美香 教育部次長 嶋壽 忠正</p> <p>教育総務課長 西山 貞文 教育施設管理課長 宮崎 明</p> <p>学校教育課長 上田 幸一郎 社会教育課長 原田 和之</p> <p>学校教育課副参事 藤本 英治 学校教育課主幹 梶山 慎也</p>
議題	<p>【次第】</p> <p>1 会議</p> <p>(1) 市長挨拶</p> <p>(2) 会議</p> <p>ア 取組説明（テーマ：ICTを活用した教育について）</p> <p>（ア）山口市の取組（学校教育課）</p> <p>イ 小・中学校における取組</p> <p>（ア）宮野小学校</p> <p>（イ）二島中学校</p> <p>(3) 意見交換</p>

内容	<p>会議開会（15時）</p> <p>○石津教育部長  ただいまから、令和7年度山口市総合教育会議を開催いたします。私は、この会議の進行を務めさせていただきます、教育部長の石津です。よろしくお願いいたします。はじめに、本会議の主催者でございます伊藤市長が御挨拶を申し上げます。</p> <p>○伊藤市長  それでは、会議の開催に当たりまして、一言、ご挨拶を申し上げます。  ～挨拶～</p> <p>○石津教育部長  ありがとうございました。ここで、出席者の御紹介をさせていただきます。本日の出席者につきましては、お手元に配布しております名簿にてかえさせていただきます。どうぞ御了承ください。  それでは、これより会議に入らせていただきます。本年度のテーマは「ICTを活用した教育について」でございます。まず、学校教育課から本市の取組について御説明いたします。次に、宮野小学校の取組と、二島中学校の取組について、それぞれお話をいただき、その後、意見交換に移りたいと思います。それでは、学校教育課から説明をお願いいたします。</p> <p>○椛山主幹  失礼します。山口市教育委員会学校教育課の椛山と申します。よろしくお願いいたします。  ～山口市の取組を説明～</p> <p>○石津教育部長  次に、宮野小学校の金谷先生、お願いいたします。</p> <p>○金谷教諭  本日はよろしくお願いいたします。  ～宮野小学校の取組についての説明～</p> <p>○石津教育部長  ありがとうございました。  次に、二島中学校の金丸校長先生、お願いいたします。</p>
----	--

○金丸校長

よろしくお願いします。

～二島中学校の取組についての説明～

○石津教育部長

ありがとうございました。それでは、これより意見交換とさせていただきます。時間は約40分間を予定しております。よろしくお願いいたします。

○山本委員

お二人の先生、どうも素晴らしい発表をありがとうございました。普段、学校訪問をさせていただいているのですが、これほど、ICTを活用した授業は、正直、見たことがありません。資料を提示するか、友だち同士の意見を1つの画面に投影するか、そういった授業しか見たことがなかったので、世の中がこんなに進んでいるのかというのを改めて実感した次第です。今、金丸先生は、中学校ですが、スタディポケット、これは小学校でも活用されていますか。

○金丸校長

スタディポケットは、全県の中学校に導入されております。昨年、うちは県の指定校でしたので、2年目になります。小学校さんはまだですね。

○山本委員

まだ、ということは、今から導入されるようになるのですか。

○金丸校長

それは、分かりません。

○山本委員

スタディポケットは、かなり高度だから、小学校で導入するというのは、かなり難しいかなと思う反面、いずれそうなるのかなと思ったりしています。でも、何となくICTにも、導入の段階があるような気がするのです。その段階というのを、どういうふうに捉えれば良いのかというのを、お二人の先生に聞いてみたいと思ったのです。段階なんてないと言えばそうなのですが、その辺、何かあれば教えていただきたいなど。

○金丸校長

私もよく分からないのですが、そもそもチャットGPTは、年齢制限が設けられていたと思います。スタディポケットも導入された時は、中学1年生は使わないということでしたが、今は小学生でも使えるようにしているようです。最

初に出た時は、使い方ともかなり難しかったりして、先ほども少し申しましたけど、違う内容もだいぶ教えるのです。県の形を示した時に、これ何県？と、子どもが聞いたら、全く違う県を答えて。何回聞いても違う県を言うのです。そういうこともあって、使い方がどうなのかなと思った時もあります。

現在、生成A Iはすごく技術が進歩してきて、使っているスタディポケットも、かなりの精度で、答えをきちんと言ってくれたり、使い方が簡単になったりしてきているということを、今、感じております。

○石津教育部長  
金谷先生。

○金谷教諭

小学校の方は、まだまだ生成A Iについて、勉強不足の部分もありますし、使えるかなと考えてみると、やはり今、金丸校長先生も言われましたけど、違う内容をいかに小学生が見抜けるかというところが、キーポイントになってくるかなと思います。まずは子供たちが、違う内容をきちんと見抜ける力だったり、活用する力だったりというところをつけていくことの方が大切なのかなというところ

○山本委員  
そうですね。

○金谷教諭  
はい。なかなか難しいかもというところも感じました。

○山本委員  
よく分かりました。

○佐藤委員  
ありがとうございました。今の山本委員さんのご質問と少し関連して、感想なのですが、私自身は保育者養成に携わっております。どんどん幼児教育にもA Iを、ということ言われていく中で、1番最初の学校教育課の発表の中で、子どもたちというのは、A Iはすごいと思うのと同時に、本物かどうか判断する、どう向き合うかが大切だという話が、すごく印象に残っていて。でも小学生だからそう思えるのですが、幼児だと、すごいと考えることなく、当たり前のことだと受け止めてしまうと思うのですね。その時に、現実と仮想空間との混同が課題だと言われたのですが、むしろ幼児は、現実と創造空間と混同してこそその幼児というか、その中で、物語の中に落とし込んだりして。本当は、混同した方

が、幼児教育には良いのだろうと思う中に、どこまで幼児教育にA Iとか、I C Tとかが使えるのかなというのを思いました。答えはないのですが感想です。ありがとうございました。

○石津教育部長

ありがとうございます。お願いします。

○角川委員

私もまだまだA Iにはついていけないので、大変勉強になりました。私は学校教育課のお話の中にあつた、光と影というのが、すごく印象的で、私も常日頃、便利なものって、どんどん今できていて、便利なものって、必ずそこには光と影があるなというふうに、いつも思っています。便利なのですが、必ずそこにデメリットも潜んでいるので、それが今日の2校のお話を聞いている中でも、すごく便利で、これで先生たちの負担も減るし、子どもたちの思考の幅も広がるし、導いてもらってすごいなと思う反面、それによつての影って何だろうというふうに、常に考えながら話を聞いていました。ただ、子どもたちの発表の中でも、上手く使っているから、そういうふうなことは理解していて、やはりその上手く使うというのが、私たち大人でも、まだそこができていないのかなというふうに、すごく感じるころなのですね。それが低年齢化すればするほど、上手く使うということが、大変難しい問題なのかなと思うので、その辺りを今後、どういうふうに取り入れていくかというのが、すごく大きな課題かなというふうに思うのと、その影の中に私はそういうものが出来た時から、視力の低下とか、肩こりによる頭痛とか、そういうことがすごい心配というか、だからやはりアナログの良さ、絶対にそういうものもなくさないでほしいし、上手に付き合っていくということが、ずっと今もお話の中にあつたのですが、そこは、ぜひそうしてあってほしいなという、願いも込めての感想です。ありがとうございました。

○石津教育部長

ありがとうございます。はい、どうぞ。

○鮎川委員

失礼いたします。お二人の先生、どうも素晴らしいご発表をありがとうございました。この場でご発表されたということは、お二人のご発表というか、小中学校が、山口市の平均というわけではないのですよね。進んでおられるということですね。新しいことに、どんどん取り組んでおられるというところに、とても私は素晴らしいなと思ったのです。金谷先生の方で、最後の辺りにお話をされましたけど、ミニ研修をされたり、O J Tをされたりとかで、先生方がいろいろなアプリを、まず知ることと、それから使いこなすことがあるだろうと思うのです

けど、その辺りの様々な工夫とか、あるいは、やはり難しさもおありだったのではないかなというふうに拝察をいたしますので、特に苦勞されたこととか、工夫されたことについて、少しお聞かせいただければというふうに思います。それから、先ほどのご発表の中で、小学校の先生で週3日以上使っておられるのが93%で、中学校の先生は63%ということで、そうすると小学生が中学校に上がったら、何だか使っていないくてつまらないというふうになりかねない、そうなってはいけないと思うのですが、その辺りの理由は何なのか。中学校は、教科担任制ですから、教科によっては、やはり使いにくい、使おうと思ったら使えないことはないと思うのですが、やはり使いにくいという、そういう教科の特性もあるのかもしれないし、またコンピューターとかそういうものに対して、苦手意識を持っておられる先生もおられるのかもしれないのですが、その辺りの考えられる理由などについて、金丸校長先生、少しお聞かせいただければと思います。

#### ○金谷教諭

自分は割とICTを使ってみて、上手くいく部分といかなかった部分を、他の先生方に知らせるといって、その位置にいたりもしたので、使ってみてどうなのかなというふうなことで、自分もわからないなりに使ってみて、上手くいったかいかないかということ、少し考えたりするのが大変だったと思うのですが、年齢が上がっていくにつれて、機械はちょっとという先生も多くいらっしゃって、その先生方に何とか使っていただきたい。ずっと教員をやられて、子どもたちもそうだし、学びのスペシャリストなわけですから、その先生方と、若手の機械が鍛錬な先生の技術が、2つともが上手くいくと、すごく良い授業になるのではないかなと考えていて。若手は使えるけど、どのような授業で使ったら良いか、どうしたら上手く自分の個別最適な学びとか、協働的な学びに繋がるのかということと、ベテランの先生方の指導の上手さもあるのですが、それが機械になると難しくなる。そういう橋渡しではないのですが、そういったところが上手くいけるように、いろいろな先生と話しながら、一緒に研修をやってきました。わりと親身になってやってみたいという先生もいらっしゃるの、その先生とも一緒に、何とかやってきているところです。

#### ○金丸校長

本音の部分で言うと、学校教育課さんから叱られるかもしれないですけど、導入1年目の時は、やはりご年配の方、自分も年を取っていますけど、ご年配の教員は、「私はちょっといいよ」みたいな感じだったのです。ただみんなで、いろいろ使っていく、子どもたちが使っているのだからということ言って、研修を定期的に積み上げることで、みんな使っていくような形になってきたかなというふうに思っています。2年目は、メンバーは変わりましたが、4月の最初の職員会議で、聖域はないから、とにかくみんなやりなさい、ということをおっしゃって

もらいました。子どもたちが正しく使うためには、教員が使い方をきちんと分かっていないと難しいのです、生成AIは、指示の出し方というのがあって、プロンプトといいますけど、あれをどう入れたら正しい答えが返ってくるか、有効な答えが返ってくるか、というのがあるのです。それを教員が研修していないと、全く意味がない。子どもたちに教えるのは、計算の仕方とか、答えを教えるのではなくて、どう言ったら正確な答えが生成AIから返ってくるのか、というところを教えられるように、というのが大事なかなと。それが上手いかないと、なかなか進まないかなというふうに思っています。

○石津教育部長

はい、ありがとうございます。

○藤本教育長

梶山さん、少し言ってみて。アナログとデジタルのベストミックス。

○梶山主幹

先ほど委員さんからもありましたように、小学校で使っているのだけど、中学校で下がるといのは、実際に数値としても出ております。やはりICTを使う上で、教科の特性というはあると思います。あとは、長く同じ教科をされる先生方の授業の流れの中で、例えば熟練の技術を持って、ワークシートをしっかりと作っておられるとか、ここでこういう資料を見せれば、子どもたちができるというふうに、アナログの時に、しっかりと授業を作られている方がいらっしゃった時に、そこにデジタルを入れ込むというのは、金谷先生もおっしゃったように、アナログで成立しているものにデジタルを入れるというところに、1つ大きなハードルがあると思っています。一方で、子どもたちはしっかりと使えるように、6年間で育てているので、子どもたちにもう少し任せたら、もう少し預けたら、子どもたち使えるのだけど、そこがまだまだ。その子どもたちに信じて任せて、教員もその様子から見て、自分たちも今、金丸校長先生が言われたように、それならもう少し自分も入れてみようかという、この小・中の繋がりというか、学びの連続性というところを、しっかりと高めていきたいなというのは、学校教育課としても思っているところでございます。

○藤本副参事

失礼します。今の話の続きにはなるのですが、私はこの63%というのが、中学校で行われている、教科のうちの何教科で、こういったICTを使っているかというような割合になってくるかと思うのです。先日、教育長さんと、ある中学校に訪問した時に、やはり良い授業をしている先生方が多い学校は、本当にICTを要所要所で使われているのです。ただ、学校の中にそういった風土というか、

そういったものがない。今までの20～30年前の座学の黒板に書いてある問題をひたすら解くみたいな授業をされて、子どもたちもそれを大人しく聞いているといった学校では、やはり使用率が上がっていない。やはり基本的には、その学校の授業を良くしていこうという、そういった風土に、大きく関係してくるかなと思っておりますので、市教委の方もそういった授業を、しっかり良い授業をしている中学校さんの実践を広めて、横展開していかなければいけないと強く感じております。

○石津教育部長

はい、ありがとうございます。

○角川委員

質問を良いですか。すみません、何個か。1つは、金谷先生にお聞きしたいのですが、子どもたちが、素晴らしく、おもしろい、楽しい動画を作られていたのですが、あれは、大人ではなく子どもがああいう形で発信するというのは、子どもたちにとっても、より自分のこととして取り入れられると思うし、素晴らしいと思うのですが、あれを作ろうと思ったのは先生の誘導なのでしょうか。それとも自分たちで考えたのでしょうか、ということをお聞きしたいことと、あと金丸校長先生にお聞きしたいのが、読書感想文を生成AIを使って導いてくださる、ああいう形で、実際に中学校でそれをやってみられたのか。そしてその提出された感想文は素晴らしいものができたのか、ということをお聞きしたいです。読書感想文って、親にとってもすごい負担で、私も辛くていつも夫に任せていたのですが、ほとんど子どもが自分でやったことはなかったのです。ただ、ある時ネットで、1日で読書感想文が自分でできる塾みたいなのが夏休みにあって、本当に1日で子どもができるのだろうかと思って1回入れてみたのですが、本当にできたのです。さっきの生成AIのような流れで、先生がそこで、塾の先生とか個人なのですが、導いてくれた。そういう誘導の仕方、自分でできたのだという達成感がすごいあったみたいで、生まれて初めて自分が作ってきたとすごい喜んだのですが、こういう生成AIを使ってそういうことができれば、本当に素晴らしいなと思ったので、子どもの成果、そういうものがあれば教えていただきたいと思いました。

○金谷教諭

動画についてですが、アンケートを取った時に、子どもたちが寝る時刻が遅いとか、朝食を食べていないという問題がある中で、どうしたら上手く伝わるかなとか、子どもたちに、どうやったら全校のみんなが意識できるかねと言った時に、子どものアイデアとして動画という選択肢もあるし、ポスターを使うとか、放送を呼びかけるという中の1つなので、教員が動画にしようと言うよりは子ども

の意見の方が強いかなと思います。普段、他の委員会とかもそうですし、何かお知らせがある時にはこの動画を使おうというような、自分たちで撮ることもできますので、そういうふうになってきているかなと思います。

○金丸校長

読書感想文は、これは自分はやってみました、実際に書けるかどうかということで。すごい手間なのです。ただ、やっていくうちに、どう聞いていったらいいのか、最後、いろいろなものが集まってくるわけです。いろいろなものが集まってきた時に、最後どうまとめるか、どう構成したら良いのと言ったら、きちんと教えてくれます。ずっと記録が残ってきていますので、きちんと答えてくれる。これは使えるなど。今度、自分が授業を持った時にやろうというふうに思っています。それを国語の教員がうちにもいますけど、ぜひ、それは紹介して、やっていきたいというのが分かったのが最近です。ただ、実際には他の作文は、結構利用している子がいます。例えば、交通安全の作文を書こうとか、人権の作文を書こうとかいう時に活用している子どもがいて、実際に書けたよという話は聞いたことがあります。なかなか使いようによっては、使えるのではないかなと思います。それから、使い方なのですが、例えば子どもたちも挨拶とかしないといけないじゃないですか、行事がある時。その時に、どういう使い方をしているかというと、自分だったら何とかの挨拶をするから、挨拶文を500字くらいで作ってと入れて、ダーッと出てきた挨拶文を少しいじる、というような活用の仕方があるかと思うのですが、子どもたちは違うのです。きちんと、最初に自分で作って、それをに入れて添削してもらうのです。そういうことをうちの子どもたちはやっているの、何を時間かけてやっているのかなと思うのですが、実際にその使い方って、とても大事なかなというふうに思っています。

○石津教育部長

はい、ありがとうございます。須藤委員さん。

○須藤委員

お世話になります。とても貴重な授業の知見ありがとうございます。特別支援からの視点でよろしければ、お二人それぞれお答えいただけたらなと思います。金谷先生は、ICTの中でニーズがある子どもたちに対する取り組みで、1つポイントになりそうなところ、最近の事例でも結構です。このようなふうに見えるよという予定でも構いませんので、教えていただけると幸いです。それから金丸先生は、できればAIも含めて、例えばニーズのあるお子さんたちで、どういうニーズがあるかは、現場の実態におまかせしますので、何かその辺りでポイントがあれば教えてください。

○金谷教諭

小学校は肢体不自由の子が3名おりまして、手が麻痺しているとか、歩くことができない子もいるのですが、そういった子に対しては、書くというのはなかなか難しかったり、写すこともそうですし、そういうのが難しい子に対して、板書を写真に撮ってとか、書いたりする時もペンを持ってタッチで操作するとか、そういう部分では、すごく活用できているかなと思います。

○金丸校長

本校では特別支援、自閉情緒のお子さんが1人いらっしゃいますけど、その子が気分によって、なかなか使ったり使わなかったりという時があるのですが、やはり使う時に支援してあげるといえるのか、こうしたら良いのだよというのが、横でついている教員が必要なのかなということは、よく感じます。ただ実際、生成AIは個人で使うというのが、すごく大事なことなので、使いこなせるようになるまでは、やはり支援をする人というのは、絶対に必要だなというふうに思います。家に帰って、1人で家庭学習において使ったりすると、本当に効果があるなと思っていますけど。うちもそれで、学力もずっと上げていきたいなと思っています。

○角川委員

実際に上がったのですか。

○金丸校長

1年目は、とても良かったです。そこにいた3年生も、かなり優秀な子もいたので良かったのですが、2年目にもっと成果が出るはずだったのですが、生徒数も極端に減りましたので、一人ひとりを見ると上がっていると思います。ただ平均すると、まだ少し低いのかなということで、個別に対応していくものなので、それを今後もやっていくといいかなというふうには思っています。

○石津教育部長

ありがとうございます。

○須藤委員

大変、貴重な知見ありがとうございます。特別支援の分野を目指す学生を養成している時に、ICTの話は結構授業でやるのですが、子どもたちのニーズに対してICTを使うという視点では、おそらく先生方がおっしゃった通り、彼らのニーズに個別に調整するところが、やはり1つのポイントで、それを彼らが自力でやれるようになるというのは非常に時間がかかる。ニーズがあるところの専門とICTの専門の両方を学生に教えるのは、すごく大変だなと個人的には思って

います。もう1つは、得意・不得意の大きなお子さんの中には、もっとこれらが活用できるお子さんもたくさんいて、例えばプログラミングとかをさせると、大人顔負けの子どもって、多分一定数いると思うのですよね。そういう子たちが、上手く学んでいって次に繋がるというところにも、ICTを私は少し期待したいと思っていて。ただ、それを学生に教えることは、少し怖くて、情報の先生でも、しかもそれ以外のことは学んでいないと、教育ではそもそも、と言われればそこまでなので、その辺りをお願いしたいと言いながら、でも一緒にやっていかなければいけないところだなと、改めて思っています。

#### ○横山委員

少しほど、お聞きしたいと思います。昔からのことわざであるのですが、失敗は成功のもとといえます。今、生成AIとか聞いて、言うなれば本当の学力をつけるには、一度失敗をして、それからジャンピングアップをするというふうに、昔からよく言われていたのですが、今のお話を少し聞いてみると、失敗しない方法を何とか探し当てて、子どもたちを成長させようというふうにも聞こえないことはないような気がするのですよ。私は子ども会とかやっていて、いろいろな料理を作って出したりする時に、まず1人で考えさせて、すごい失敗をして、それから何で失敗したかで始まるというのが、教育でも同じことだと思うのですが、その部分の子どもたちに、変な言い方ですけど、上手い失敗をさせることをどういう形で、この今のICTとかを使われてやるということは考えられているのでしょうか、ということです。お願いします。本人もよくまとまっていなくて、答えが難しいかもしれないですけど、よろしくお願いします。

#### ○金谷教諭

私が今、4年生を担当しております。今、国語の要約の勉強で、要約ってすごく難しくて、子どもたちは文章を見るだけでも、何かこうちょっととか、書いたりするのちょっと、となる子が多い中で、まずは要約をさせてあげたいということで、まず土俵に上げるために、私はICTを使って、子どもたちのタブレットに全文を一文ずつコピーして、その中で自分が必要な文章を選ぶ。書き写すとなると、やはり苦手な子もいるし、そうすると、この要約の授業というのは成り立たないので、ICTを上手く使いながら、授業の目的に合ったことを検索できるようにする。そこで、また書くことで、まず失敗して、次に要約についていくと、そのハードルが高い子たちもたくさんいるので、まずはその土台を作ってあげて、要約を失敗させながら学べるように、使えるところはしっかり使って、やっていっています。

#### ○金丸校長

おっしゃったことは、本当にそうだなと、私は思っています。生成AIを使う

中で今、少し考えていたのですが、今、金谷先生もおっしゃいましたが、例えばA Iドリルとかは、やる中で間違ったらバツがずっと出て、あれはおもしろいところがあって間違った問題を何回も出したりする。その失敗経験をしながら、少しずつ正解に近づいていくという体験が、生成A Iでもできるのかなというふうには思っています。失敗をどこでさせるかということは非常に重要で、万人の前で大恥をかくというような失敗は、やはり避けなければいけないかなというふうには思っています。そういった面では、とても自信がない子どもたちが、本当に最近多いなというふうには思っていますので、自己肯定感を引き上げるためにということ考えた時に、この生成A I、スタディポケットは、まず本当に先ほど言いました、よいしょしてくれるのです。みんなすごいね、みたいな。それで褒めてもらって、それで答えも確認ができるわけなのです。発表しようと思った時もスタディポケットで答えを合わせて、手を挙げて発表するとか、それでまた自信がついて、褒められてという良い循環ができるものだなということを感じています。割と自身がない子は、自信をつけさせるためのおもしろいツールだなというふうには感じています。

○横山委員

ありがとうございます。

○石津教育部長

ありがとうございます。はい、須藤委員さん。

○須藤委員

生成A Iの中にはモードとかがあって、やり取りする批判モード、討論モードみたいながあると思うのですが、スタディポケットにはそういう機能はないのですか。

○金丸校長

全部見ていないのですが、いろいろなモードが開発されています。うちは県の指定を受けたので、先ほど言いました、ふたまるというのがキャラクターなのですが、ふたまるモードというのをに入れてもらっているのですが、答えを、ふたまるが出てきて、最後に「それは違うだに。」とかも作っていただけるのです。英語とかは特化していて、かなりの対話ができるとか、単語のしりとりができるとか、そういうものがたくさん導入されているので、教員は、そういうのもたくさん出てきているから、活用するといいね、みたいな話は聞きました。

○須藤委員

ありがとうございます。なかなか難しいですね。いろいろ増えてくるのに、我々

が気づいていけないので、どういうものが増えたのか。それを試さなければいけないとなると、ますます先生方は大変だなと。

○金丸校長

警察官になりたいという子は、ディベートするという話がありましたけど、家で1人向かい合ってディベートしているのかなとか、大丈夫かなとか思ったのですが、そういう使い方をする子が増えています。うちは、ずっと使っていますので、やはりそういう使い方をする子は、たくさんの人の前で、他にもたくさん動画があるのですが、堂々としゃべることができるというのは、やはり使いこなしていないとなかなかできないかなと思っています。

○須藤委員

目の前にあるAIのやり方以外のやり方がないかな、と自分たちで探索してみるのはないかと思うのですが、その根底は、先生方が仕掛けられるとか、自分の何かとリンクしていきそうなイメージですよ。

○金丸校長

アドバイスをあげる場合もありますけど、自分で開発していくという。

○須藤委員

このようなふうに使えないか、みたいな感じですよ。分かりました。

○石津教育部長

よろしいですか。他の委員の方、何か一言ありましたら、最後よろしいですか。

○山本委員

私は、前回ICTを話題にした教育会議の中で、漢字を書くという行動は、動作はなくなるのかと、いうふうな質問をしたことがあります。私、学生時代視聴覚教育研究室という、当時、テレビを分断視聴するのか、それとも丸ごと視聴がいいのか。今、考えればバカみたいなことを、真面目に検討したことがあります。西本・山下論争とっていました。それが、どんどん時代が進んで今になってしまえば、AIにしてもICTにしても、それをいかに使うかという中で、いわゆる論点は違うけど、いろいろな使い方というのが出てくるだろうから、でも最終的にはそれを丸ごと捉えてやるのがいいのだよ、というふうな形になってくるだろうと思うと、漢字についても、実は私の孫が1年生になって、漢字をタブレットでやるのを見ているからですね、やはりそういう時代になっているのです。書き順だけではない。私は繰り返して書くという行動は、絶対にAIでは、あるいはICTでは無理だと思っていたのに、それをやっているのです。4回書いた

ら消えるとか。あれを見て、自分の考えは間違っていたと思い始めました。だから、最終的には、それをAIに取って代わる時代がくるのだろうなと思いますけど、今の時代、アナログも大事だよということを、やはり学校教育課の資料の中にも書くことの大切さ、アナログの大切さというのがありますから、これはぜひとも、逃してはいけないと思いながらもですね、昨日学校訪問した学校で、ある先生が俳句の勉強で、俳句を自分でAIに入れて、それで絵を描かせたのです。そしたら、それらしい絵が出てくるのですね。それを見た時に校長が、あとで終わって校長室に帰って、あれは何で絵を出して、歌を出して、どの歌か当ててごらんと、いうくらいの発問をしておいたら、まだ意欲が図られたのにな、というふうにも言われました。それも教員が、今は、まだそういう状態ではないと思いますが、いずれ教員が、そういうことをどんどんやっていきながら、教材開発していく、そういう時代になってくるのだろうなと思いますから、それに対する指導力、リードしていく校長先生、あるいは研修の先生は、また大変になるだろうなというふうに思いながら、本当に良い勉強をさせていただきました。ありがとうございました。

○石津教育部長

はい、ありがとうございました。他にもいろいろと、意見交換をされたいことはあるかと思いますが、予定時刻となりましたので、これで意見交換を終了させていただきたいと思います。それでは教育長から一言、お願いします。

○藤本教育長

今日はありがとうございました。また宮野小学校と二島中学校の先生、本当にありがとうございました。勉強になりました。今、本市は子どもたちのウェルビーイング、幸せの実現を目指して、本物の学力の育成を核として、様々な施策を展開しています。私は以前から本丸というものは、魅力ある授業づくり、そこが本丸であって、そこにICTが一つのツールとして、授業改革と思っております。今年度もすべての小中学校を訪問しました。確かに先ほど、山本委員さんがおっしゃったように、まだまだ課題もたくさんありますが、以前に比べると、かなりアナログの部分も大事にしながら、ICTを有効に活用した授業改革、主体的な学び、深い学び、これを意識した授業も進みつつあるかなと。特に中学校は、本当に最初は昭和の時代の授業がずっと続いていたので、かなり変わってきたかなと思っております。ある小学校で、休憩時間の中で、AIドリルを使って、掛け算の競争をお互いにやり合っていた。これは勉強ではなくて、本当にゲーム感覚でずっとやっていて、ああ、すごいなと思って、それが全国学力学習状況調査とか、そういった結果にも結び付いているかなと思います。その反面、やはり課題として授業の中でアウトプットする時間、先ほど出ていたアナログとデジタルのベストミックスの授業、これをどう構築していくのかという部分、そういったも

のも踏まえて、さらに授業改革をしていく必要があるのかなというふうに思っています。今日、聞いて改めて思ったのは、環境があると、子どもたちは自ら学んでいくと。要するに環境というのは、ICT環境の整備だけではなくて、課題発表ができる機会であったりとか、あるいは質問への問いかけであったりとか、そういったものを、すべて網羅したものが環境として、子どもたちのやる気とか、自己肯定感に繋がっていくのかなと思いました。今日は、宮野小学校は普通の文房具のようにICTを使っておられますし、授業を聞くことができない子どもたちとオンライン授業とか、すごいやっていただいて感謝しております。また二島中学校さんの方も生成AIを使って、なかなかまだ難しい部分があるのですが、生徒の学びを支えるパートナーとしての役割をすごく果たしていて、答えを教えるのではなくてヒントをもとにして自分で考える思考の過程、これを重視した授業を仕組んでおられるということに、改めて感心しました。先ほど二島中学校の事例発表の中で、今からどんどん進む中でバイアスとか、それからハルシネーションですね、そういった課題も指摘されておりましたし、先ほど、うちの方からも光と影という話もありました。これからそうは言いながら、社会はどんどん進んでいって、AIが医療分野とか、福祉分野とか、科学技術とか、いろいろ関わっていく。そういった中で、今から今後、AIとの関わり方、情報リテラシーへの教育、これが、より今から求められていくのかなということを、改めて思いました。確かに教員のICTのスキルも、かなり格差があるのは事実ですし、それを今から校内、あるいはうちが、どういうふうに支援をしていく中で、どうその授業を作っていくか。これをしっかり、また今から研究していきたいなと改めて思いました。どうもありがとうございました。

○石津教育部長

ありがとうございました。最後に市長から一言、お願いいたします。

○伊藤市長

今日は、本当にお疲れ様でした。いろいろお話を伺っていて、私もためになりました。最近、私も実はチャットGPTを非常に使っていて、各地区の運動会とか、文化祭に行く前にちゃちゃっと入力して簡潔に述べよとかいうのですが、やはりかなり精度が良くなっているなというふう実感しています。そういった辺りは二島中学校の、あくまでもツールとしての生成AIだという、限定的な使い方をされているので賢いなど思ったのですが、下手したら感情移入して、あるいは尊敬が始まったり、あるいは友情を感じたり、あるいは一人ひとりに愛情を感じたりとか、そこまでいく可能性がないのかなと、そういった意味ではメディアリテラシーが随分変わってくるなといった気が、今日は少ししたところがあります。それと、佐藤先生が言われたのが、生成AIの能力がどんどん上がっていくと、いわゆる人間の想像力、クリエイティビティって何だろう。そこに1番

問題が突きつけられるのかなど…。この絵をバンクシー風に出してとか、ゴッホ風はどうぞとか、全部出てしまうわけで、そういう時の表現というのは、1番問われてくるような気がするな、というふうな気がしました。今後も教育委員会と話しながら、進めていければと思っております。本当に今日はどうもありがとうございました。

○石津教育部長

以上を持ちまして、令和7年度山口市総合教育会議を終了させていただきます。皆さん大変お疲れ様でした。ありがとうございました。

会議閉会（16時56分）